

完璧な愛とは

木村 敏美

別れは突然やってきた。唯の膀胱炎の治療で入院し二ヶ月余りで他界、夫八十才。死の二週間くらい前に、膀胱の特殊な場所に進行の速い癌が見つかり治療を始めたが間に合わなかった。子供や孫たちも福岡在住なので、毎日誰か見舞いに来てくれ、夫は孫と卓球の話をしたり貸農園の申し込みを頼んだりしていたので現実はまだに信じられない。

振り返れば振り返るほど、夫が私を素晴らしい人生に導いてくれたと痛感する。転勤でマレーシアにて生活した時も、定年後孫のために小高い山の上に土地を買い畑を作り山小屋まで自分で手作りした時も、私は必死でついていくだけだった。私は元々絵画が好きだったので、マレーシアではインドネシア染織（バティック）を、山小屋では山から見える美しい景色や小さい孫たちを沢山描いた。あるきっかけで文章を書いていると、夫はネットで「企業OBペンクラブ」を探して申し込んでくれた。このクラブの年会誌『悠遊』二十七号の表紙絵に採用されたのがきっかけになり、私の描いた絵が太平洋美術会と繋がっていった。

典型的な理系の夫は不言実行型で口数は少ない。河島英吾の「時代おくれ」的で、観る映画も活劇ばかり。シャンソンの「愛の讃歌」などを聞くのは耐えられないようだ。長女の夫が妻の誕生日に花束を贈っているのを知り、私も夫に花束を贈るように頼んだことがあった。すると夫が買ってきたのは近所の八百屋から仏壇用の菊の花……絶句！

二〇二三年にOBペンクラブのご依頼で上京してバティックの講演をした。東京滞在中に新宿御苑に立ち寄った時に、台湾から来た若い女性が「あなた達の写真を撮った」とスマホを見せた。夫が「なぜ撮ったの」と聞くと、「ビューティフル！」との答え。長い年月、支え合った温かい雰囲気を感じられたのか？

夫は「ありがとう」とはよく言ってくれたけれど、「愛してる」とか「好き」という言葉はなかった。「仲がいいね」とはよく言われるが、甘い言葉や花束はなくても支え合う力で勝負！ という繋がりだろう。完璧な愛とは言えなくても、見知らぬ人も感じる繋がり、言葉や花束を超えているからと確信した。